

## 聖書とゼロリスク信仰

### 第1回 ゼロリスク幻想とは何か

#### "完全な安全"を求める時代の病

私たちは今、あらゆる場面で「安全」を求める社会に生きています。

食品には添加物がないことを望み、環境には一切の有害物質を排除しようとし、交通事故や災害、感染症までも「ゼロ」を掲げて対策を求めます。

こうした傾向は一見、善意に満ちた行動のように思えます。しかし、そこにはしばしば、「ゼロリスク幻想」という危うい信念が潜んでいます。

ゼロリスク幻想とは、「すべての危険や不確実性を完全に排除することができる」という思い込みのことです。

それは、人間の技術や制度、知識を信じすぎるあまり、「完全な安全」を自分の手で作り出せると考えてしまう心の姿です。

けれども、どんなに科学が発達しても、どんなに注意を重ねても、この地上に"絶対に安全な状態"というものは存在しません。

心理学では、この傾向を「ゼロリスク・バイアス」と呼びます。これは、「小さなリスクを完全にゼロにすることを、大きなリスクを大幅に減らすことよりも好む」心理傾向です。

たとえば、確率1%の危険をゼロにするために、確率50%の別の危険を放置してしまう——それが人間の直感的な選択です。

この心理は、合理的な判断というよりも、「不安を解消したい」という感情的な欲求から来ています。そして聖書は、まさにこの欲求の根源を問いかけます。

自然界も社会も、そして人間の心さえも、常に変化し、不確実性を抱えているからです。

#### 1. 「恐れ」から生まれる信仰のすり替え

では、なぜ私たちは「ゼロリスク」を求めてしまうのでしょうか。その根には、「恐れ」があります。

人は誰しも、病気や事故、災害、そして死を恐れます。その恐れを少しでも遠ざけようとして、あらゆるリスクを排除しようとするのです。

けれども、その姿勢が行き過ぎると、「恐れ」が信仰の中心に座ってしまうこととなります。

イエスは、弟子たちが嵐の中で恐れおののいたとき、こう言われました。

「なぜこわがるのか、信仰の薄い者たちよ」（マタイ福音書 8 章 26 節）

恐れは、信仰を押しつけて心を支配します。恐れを支配するところでは、人は神に信頼することよりも、自分の力で安全を確保することを優先してしまいます。

ゼロリスク信仰とは、まさにこの「恐れを信じる信仰」です。

## 2. 「完全な安全」を追う人間の傲慢

聖書の中に、「愚かな金持ち」のたとえ（ルカ福音書 12 章 16～21 節）があります。

そこで一つの譬を語られた、「ある金持の畑が豊作であった。そこで彼は心の中で、『どうしようか、わたしの作物をしまっておく所がないのだが』と思いめぐらして言った、『こうしよう。わたしの倉を取りこわし、もっと大きいのを建てて、そこに穀物や食糧を全部しまい込もう。そして自分の魂に言おう。たましいよ、おまえには長年分の食糧がたくさんたくわえてある。さあ安心せよ、食え、飲め、楽しめ』。すると神が彼に言われた、『愚かな者よ、あなたの魂は今夜のうちにも取り去られるであろう。そしたら、あなたが用意した物は、だれのものになるのか』。自分のために宝を積んで神に対して富まない者は、これと同じである」。

この男が犯した誤りは、危機管理の欠如ではなく、安全を神ではなく自分の倉に求めたことです。

彼にとっての「安全」とは、財産の豊かさであり、すなわち「自分の支配下にある安全」でした。

私たちが科学や制度、マニュアルや法律で「ゼロリスク」を築こうとする姿勢も、根本的にはこの男と同じです。

「自分の手で完璧に守りたい」という欲求は、神の摂理を超えて自らを主とする思い上がりへとつながります。

## 3. 「人事を尽くして天命を待つ」—信仰の原点

では、聖書が示す本来の姿勢とは何でしょうか。それは「人事を尽くして天命を待つ」、すなわち、最善を尽くしたうえで神にゆだねる信仰です。

旧約聖書の詩篇と箴言には、次のように記録されています。

「あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ、主はそれをなしとげ、あなたの義を光のように明らかにし、あなたの正しいことを真昼のように明らかにされる。」（詩篇 37 篇 5～6 節）

「主を恐れることは知識のはじめである、愚かな者は知恵と教訓を軽んじる。」（箴言 1 章 7 節）

ここでの「知恵」とは、自分の限界を認め、神に頼る姿勢のことです。ゼロリスク信仰は、この知恵を欠いた「自己信頼の誤り」とも言えます。

「ゼロリスク信仰」は、結果まで自分の手で握りしめようとする思いですが、「神への信仰」は、努力の先を神に委ねる思いです。両者は似ているようでいて、根本から方向が異なります。

#### 4. 「あすのことを思いわずらうな」

イエスは山上の説教でこのように語られました。

「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう。だから、あすのことを思いわずらうな。あすのことは、あす自身が思いわずらうであろう。一日の苦勞は、その日一日だけで十分である。」（マタイ福音書 6 章 33～34 節）

この言葉は、未来を無視せよという意味ではありません。むしろ、不確実な未来に対して過剰に恐れ、支配しようとする心を手放しなさい、というみ言です。

神の国を第一に求めるとは、「恐れのない生き方を選ぶ」ということです。

"ゼロリスク"ではなく、神に対する"全幅の信頼"——そこに、真の平安が生まれます。

#### 5. 結びに一恐れ信仰から、ゆだねる信仰へ

私たちは、危険や苦難を避けたいと願うあまり、知らず知らずのうちに「ゼロリスク信仰」という偶像を拝んでしまうことがあります。

しかし聖書は、人間の完全さではなく、神の導きと守りにゆだねる生き方を勧めています。

それは無防備でも怠惰でもなく、「人としてできる最善を尽くしたうえで、結果を神に委ねる」という成熟した信仰の姿です。

恐れを基準に生きるか、信頼を基準に生きるか。この選択こそが、ゼロリスク信仰と聖書的信仰を分ける分岐点です。

## 第2回 恐れ of 支配・ゼロリスク信仰の心理構造

「安全のために」という言葉ほど、人々を納得させる力をもつ言葉はありません。

誰もが安全を望み、危険を避けたいと願う——それ自体は自然なことです。

しかし、問題はその「安全」への欲求が、恐れに支配された信仰のかたちとなってしまうときにあります。

恐れは、信仰の反対側にあります。恐れが強くなるほど、人は神よりも不安を信じるようになります。

そして、不安を信じる人々が増えると、社会全体が「ゼロリスク信仰」という見えない宗教に染まっていきます。

今回は、この"恐れ of 構造"を、聖書に照らして考えてみましょう。

### 1. 「恐れ」という見えない偶像

恐れは形のない偶像です。古代の偶像は石や木で作られていましたが、現代の偶像は心の中にあります。

それは「不安」や「予測不能」に対する過剰な反応として現れます。

人は危険を感じると、本能的にそれを避けようとします。しかし、恐れが強くなりすぎると、人は「回避そのもの」を目的化してしまいます。

つまり、「恐れを感じない状態 = 絶対安全」を作ることが目標になってしまうのです。

これが心理学で言うゼロリスク・バイアス (zero-risk bias) です。

ゼロリスク・バイアスとは、「小さな危険を完全に除去できるなら、大きな危険が残っても構わない」と感じてしまう心理傾向です。

これは科学的にも非合理ですが、心の安定を求める人間にとっては非常に魅力的な幻想です。

そして、この幻想が宗教化したものが、ゼロリスク信仰なのです。

### 2. 恐れ of 中心にある「支配願望」

恐れ of 根底には、しばしば「支配したい」という欲求があります。

未来の不確実さを恐れるあまり、「すべてを自分の手でコントロールしたい」と願う——それは、創世記のアダムとエバの罪 of 構造に通じます。

神が「善悪を知る木からは取って食べてはならない」（創世記2章17節）と命じられたとき、彼らが手を伸ばした理由は何だったのでしょうか。

蛇は言いました。「それを食べると、あなたがたの目が開け、神 of ようになって善悪を知るようになる」（創世記3章5節）。

すなわち、彼らは「自分自身が判断の基準になりたい」という欲望に負けたのです。

これは、不確実な未来を神に委ねることを拒み、自分の手で世界を制御しようとする態度——ゼロリスク信仰の根源的な姿と重なります。

「不確実な未来を神に委ねる」代わりに、「自分がすべての危険を制御できる世界」を夢見る——恐れを動機としたこの支配願望は、やがて人間を神の座に置いてしまいます。

その結果、神への信頼は薄れ、恐れへの信仰だけが強くなっていくのです。

### 3. 「恐れて隠した僕」のたとえに見る心理

マタイによる福音書には「タラントのたとえ」（マタイ福音書 25 章 14～30 節）があります。

主人から一タラントを預かった僕は、恐れてそれを地に隠しました。彼は失うことを恐れ、何もしなかったのです。（マタイ福音書 25 章 25 節）

この僕の心を動かしていたのは、「失敗したらどうしよう」という恐れでした。恐れは、行動を止め、成長を妨げ、信仰を麻痺させます。

ゼロリスク信仰も同様です。「何か起きたら困るから」「万が一に備えて」——こうした言葉の裏には、信頼よりも恐れが支配しています。

しかし、信仰とは「リスクを取る勇気」でもあります。アブラハムが神の言葉に従って見知らぬ地に旅立ったとき、彼は一切の保証を持っていませんでした。

それでも歩み出したのは、「神が導いてくださる」という確信があったからです。恐れを超えたところに、信仰は芽生えるのです。

### 4. 恐れを手放す方法——神への信頼

イエスは言われました。

「何を食べようか、何を飲もうかと、自分の命のことで思いわずらい、何を着ようかと自分のからだのことで思いわずらうな。」（マタイ福音書 6 章 25 節）

この教えは「準備を怠れ」という意味ではありません。むしろ、思い煩いによって信仰を失うな、という警告です。

不安な時代にあって、私たちは情報を集め、対策を講じます。それ自体は良いことです。

しかし、もしその行動の動機が「恐れ」だけであるならば、それは信仰ではなく不信仰の証です。

恐れを手放す第一歩は、「結果を自分で支配しようとする心」を明け渡すことです。

ピリピ人への手紙にはこう書かれています。

「何事も思い煩ってはならない。ただ、事ごとに、感謝をもって祈と願いとをささげ、あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい。そうすれば、人知ではとうてい測り知ることのできない神の平安が、あなたがたの心と思いとを、キリスト・イエスにあって守るであろう。」（ピリピ人への手紙4章6～7節）

ゼロリスク信仰は「恐れを消すための信仰」ですが、聖書の信仰は「恐れの中でも平安を得る信仰」です。

恐れをなくすことはできなくても、その恐れに支配されない——そこに、神を信じる者の自由があります。

## 5. 結びに一恐れへの支配から信頼への支配へ

私たちが安全を求める心は、決して悪ではありません。しかし、それが恐れに支配されるとき、私たちは「信仰の中心」をすり替えてしまいます。

恐れを中心には常に「自分」がいます。信頼の中心には「神」がいます。

人間の心は、恐れによって閉じ、信頼によって開きます。恐れは人を孤立させ、信頼は人を結びつけます。

だからこそ、イエスは弟子たちに言われました。

「なぜこわがるのか、信仰の薄い者たちよ」。（マタイ福音書8章26節）

ゼロリスク信仰の根底にある「恐れへの支配」から抜け出し、神にゆだねる「信頼への支配」へと生き方を転換する——それが、恐れの多い時代に求められる真の信仰ではないでしょうか。

## 第3回 人事を尽くして天命を待つ

「努力して、あとは神に任せる。」

この言葉は、多くの人が耳にしたことのある人生訓です。

日本語では「人事を尽くして天命を待つ」と言いますが、これは単なる諦めの言葉ではありません。むしろ、人間の努力と信仰の関係をきわめて深く表した言葉です。

現代社会では、「努力すれば必ず報われる」「結果は自分の力でつかみ取る」という考えが美德とされています。

その一方で、「すべてを神に委ねる」という生き方は、どこか無責任に映ることもあるでしょう。

しかし聖書は、人間の努力を否定せず、同時にその限界を明確に示しています。今回は、「ゆだねる信仰」とは何かを、聖書の言葉を通して探ってみましょう。

### 1. 努力は必要、しかし「結果」は主のもの

詩篇にはこう書かれています。

「あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ、主はそれをなしとげ、あなたの義を光のように明らかにし、あなたの正しいことを真昼のように明らかにされる。」（詩篇 37 章 5～6 節）

ここでは、努力するなどは言っていません。むしろ、「あなたの道を歩みなさい。ただし、その道の結果を主にゆだねよ」と語っているのです。

神にゆだねるとは、自分の責任を放棄することではなく、自分の支配欲を手放すことです。箴言にもこう記されています。

「人は心に自分の道を考え計る、しかし、その歩みを導く者は主である。」（箴言 16 章 9 節）

人は計画を立て、努力し、最善を尽くすことが求められます。しかし、その結果を最終的に保証できるのは人間ではなく、神です。

これが人事を尽くして天命を待つ信仰の根本です。

### 2. 「天命」とは、偶然ではなく「神の摂理」

「天命」というと、どこか運命論的な響きがありますが、聖書のいう「ゆだねる信仰」とは、単なる運まかせではありません。それは「神がこの世界を導いておられる」という摂理への信頼です。

摂理と運命論は似て非なるものです。運命論は「すべては決まっている」として人間の努力を無意味とします。

一方、聖書の摂理観は「神が目的を持って歴史を導かれる」という信頼であり、人間の自由な選択と努力を前提としています。

ヤコブの手紙が「主のみこころであれば」と語るのも、あくまで人間が計画し行動したうえでの、結果の委託です。ヤコブの手紙にはこのような言葉があります。

「よく聞きなさい。『きょうか、あす、これこれの町へ行き、そこに一か年滞在し、商売をして一もうけしよう』と言う者たちよ。あなたがたは、あすのこともわからぬ身なのだ。あなたがたのいのちは、どんなものであるか。あなたがたは、しばしの間あらわれて、たちまち消え行く霧にすぎない。むしろ、あなたがたは『主のみこころであれば、わたしは生きながらえもし、あの事この事もしよう』と言うべきである。」（ヤコブの手紙4章13～15節）

ここには、謙虚な信仰の姿勢が表れています。自分の計画に確信を持つことは悪くありません。しかし、未来を完全に支配できる人間はいません。

ゆだねる信仰とは、不確実な未来を恐れるのではなく、そこに神の導きを見る心です。それは受け身のあきらめではなく、能動的な信頼です。

### 3. 「思いわずらうな」とは、努力をやめることではない

イエスは山上の説教でこう語られました。

「何を食べようか、何を飲もうかと、自分の命のことで思いわずらい、何を着ようかと自分のからだのことで思いわずらうな。」（マタイ福音書6章25節）

この言葉を誤解して、「努力せずに信仰だけ持てばよい」と受け取る人もいますが、イエスの意図は逆です。

思いわずらいとは、神の領分まで自分で支配しようとする心のことです。

人間にできることと、神にしかできないこと。その境界を見極め、神にゆだねることが信仰の成熟です。

「努力を放棄する人」は、実は神に頼っていません。「結果を握りしめようとする人」もまた、神に頼っていません。

真の信仰者は、努力を尽くしつつ、結果を神の御手にゆだねる人です。

### 4. 祈りとは「ゆだねる信仰」の実践

ピリピ人への手紙にはこう書かれています。

「何事も思い煩ってはならない。ただ、事ごとに、感謝をもって祈と願いとをささげ、あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい。そうすれば、人知ではとうてい測り知ることのできない神の平安が、あなたがたの心

「**と思いとを、キリスト・イエスにあって守るであらう。」**（ピリピ人への手紙4章6～7節）

祈りとは、単なる願いごとではありません。祈ることによって、私たちは心の支配権を神に返すのです。

人間は、どんなに考え、準備し、努力しても、すべてを思い通りにはできません。

だからこそ祈りによって、「自分がコントロールしようとする領域」を神に明け渡します。それが「ゆだねる信仰」の実践です。

祈りの中で、人はようやく自分の限界を認め、同時に、限界の向こう側にある神の力を信じることができます。その瞬間、恐れは静まり、平安が心に満ちるのです。

## 5. ゆだねることは信仰の終点ではなく出発点

多くの人「神にゆだねる」というと、最後の手段のように思いがちです。しかし聖書では、それは終わりではなく始まりです。

神にゆだねた人は、恐れから解放され、むしろ大胆に行動できるようになります。

アブラハムが故郷を離れたとき、モーセが海を渡ったとき、彼らは計画よりも信頼を選びました。

ゆだねるとは、「何もしないこと」ではなく、恐れを超えて動く力を得ることなのです。

ゼロリスク信仰は、「リスクを消してから動こう」とします。しかし、信仰は「リスクがあっても動く」力を与えます。

この差こそが、恐れへの信仰とゆだねる信仰を分ける根本です。

## 6. 結びに一「ゆだねる信仰」がもたらす平安

私たちは誰しも、結果を思い通りにしたいと願います。それは人間の自然な欲求です。しかし、その欲求に支配されると、心は常に不安に揺れ動きます。

努力しても不十分、祈っても落ち着かない——それは、結果を手放せないからです。信仰とは結果を神にゆだねる勇気です。

「**主のみこころであれば、わたしは生きながらえもし、あの事この事もしよう**」（ヤコブの手紙4章15節）

この謙虚な言葉にこそ、成熟した信仰者の姿があります。

人事を尽くすことは信仰の前提であり、天命を待つことこそ信仰の完成です。

ゼロリスク信仰が「自分で結果を守ろう」とする生き方なら、聖書の信仰は

「結果を神にゆだね、安心して生きる」生き方です。

人の知恵ではなく、神の摂理を信頼するとき、不確実な未来の中でも、心には確かな平安が宿ります。その平安こそ、「ゆだねる信仰」の証です。

## 第4回 リスクを恐れずに歩む信仰

「失敗したくない」「傷つきたくない」「間違えたくない」。こうした思いは、誰の心にもあります。

しかし、その恐れが強すぎると、人は一步を踏み出すことができなくなります。現代社会では、「慎重であること」「安全第一であること」が美德とされるあまり、挑戦や冒険が抑えられる傾向があります。

その結果、「何も起こらないこと」こそ最良とする風潮が生まれました。

これはまさに、ゼロリスク信仰のもう一つの顔——"行動の麻痺"です。

しかし、聖書が語る信仰は、その正反対にあります。信仰とは、恐れを感じながらも、それを超えて歩み出すことでもあります。

「リスクを避ける生き方」ではなく、「神を信じて歩く勇気の生き方」なのです。

### 1. ギデオンの召しー「神が共にいる」から動く信仰

士師記に登場するギデオンは、神の召しを受けたとき、「わたしは最も小さい者です」（士師記 6 章 15 節）と辞退しようとしていました。

しかし神は「わたしがあなたと共にいる」（同 16 節）と答えられました。ギデオンは恐れを持ちながらも、神の言葉を信じて行動しました。

「安全が確認されてから動く」のではなく、「神が共にいるから動く」——これが聖書的勇気の原型です。ゼロリスク信仰の「確認してから動く」姿勢とは、根本から異なります。

恐れは信仰を閉ざし、行動を止めます。信仰とは、失敗を恐れぬ心であり、「神が共におられる」ことへの確信です。

### 2. アブラハムの信仰ー保証のない出発

旧約聖書のアブラハムは「信仰の父」と呼ばれます。彼は神の言葉を受けて、生まれ育った地を離れ、見知らぬ地へ旅立ちました。

彼には、地図も保証もありませんでした。しかし彼は、神が導かれると信じて歩き出しました。創世記にはこう記されています。

時に主はアブラムに言われた、「あなたは国を出て、親族に別れ、父の家を離れ、わたしが示す地に行きなさい。（創世記 12 章 1 節）

この言葉の中には、現代人が最も恐れるもの——「不確実な未来」があります。しかし、信仰とはまさにその不確実さの中で輝くものです。

アブラハムは、ゼロリスクを求めませんでした。彼は、神の言葉という"唯一の確信"を握って一步を踏み出したのです。

私たちもまた、「完全な安全」を求める代わりに、「完全に信頼できる神」を求めるべきです。

### 3. ペテロの一步一水の上を歩いた信仰

新約のペテロもまた、恐れと信仰の狭間に立った人物でした。

弟子たちが夜の湖で逆風に悩んでいたとき（マタイ福音書 14 章 24 節）、イエスが水の上を歩いて近づかれました。弟子たちは幽霊だと思って叫びましたが、ペテロはイエスと確認するとすぐに言います。

「主よ、あなたでしたか。では、わたしに命じて、水の上を渡ってみもとに行かせてください」。イエスは、「おいでなさい」と言われたので、ペテロは舟からおり、水の上を歩いてイエスのところへ行った。（マタイ福音書 14 章 28～29 節）

しかし、強い風を見て恐れた瞬間、彼は沈み始めます。イエスは手を伸ばして彼を助け、こう言われました。

「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか」。（マタイ福音書 14 章 31 節）

この物語が教えるのは、「恐れは人を沈める」ということです。

信仰とは、波が静まるのを待ってから歩くことではありません。波の中で、神を見失わずに進むことです。ペテロが沈んだのは、恐れが信頼を上回った瞬間でした。

私たちもまた、恐れではなく信頼によって足を踏み出すとき、奇跡のような道が開かれていくのです。

### 4. 信仰とは恐れの中で動く力

信仰を持つ人であっても、恐れがなくなるわけではありません。聖書の人物たちも、恐れを感じながら歩きました。

モーセは神の前で「わたしは口も重く、舌も重いのです」（出エジプト記 4 章 10 節）と訴えました。エレミヤは預言者に召されたとき、「わたしはただ若者にすぎず、どのように語ってよいか知りません」（エレミヤ書 1 章 6 節）と言いました。

彼らは決して恐れを知らぬ英雄ではありませんでした。それでも歩み出したのは、「わたしは必ずあなたと共にいる」（出エジプト記 3 章 12 節）という神の言葉があったからです。恐れながらも歩む——これが聖書的信仰の実像です。

しかし、恐れの中で止まるか、歩み出すか——そこに信仰の違いがあります。ヘブル人への手紙にはこう書かれています。

信仰とは、望んでいる事がらを確信し、まだ見ていない事実を確認することである。（ヘブル人への手紙 11 章 1 節）

信仰とは、見える安全ではなく、見えない神の導きを信じることです。

「見える安全」に頼る人は、ゼロリスク信仰の道を歩きます。しかし、「見えない導き」に頼る人は、真の信仰の道を歩きます。

恐れを完全に消すことはできませんが、恐れに支配されないようにすることはできます。それが、「リスクを恐れず歩む信仰」の核心です。

## 5. 結びに一「安全」ではなく「平安」を求めて

ゼロリスク信仰の人は「安全」を求めて歩みを止めますが、聖書の信仰者は「平安」を求めて歩み出します。

安全は外側の状態、平安は内側の状態です。安全は条件によって変わりますが、平安は信頼によって保たれます。

イエスは弟子たちに、世が与えるものとは異なる平安を約束されました（ヨハネ福音書 14 章 27 節）。それは外側の安全ではなく、神の臨在から来る内なる安定です。

リスクを避けることによってではなく、神を信じて踏み出すことによって、この平安は与えられます。

信仰とは、恐れのない人生ではなく、恐れに勝る平安を生きることです。

そして、その平安は、リスクを避けることでなく、神に信頼して行動する勇気の中に生まれます。

人は恐れをなくすことはできません。しかし、恐れよりも大きな信頼を選ぶことはできます。

それが、リスクを恐れず歩む信仰——神の導きを信じて前へ進む、聖書の生き方です。

## 第5回 神と共なる世界にこそ真の平安はある

私たちはみな平安を求めています、争いや不安、病気や災害のない世界——それが平安だと思いがちです。

しかし、もし本当の平安が「リスクのない状態」にあるのだとしたら、この地上に平安を得られる人は一人もいないでしょう。

なぜなら、私たちが生きるこの世界は、常に不確実で、変化に満ちているからです。

聖書が語る平安は、外側の環境が静まり返った状態ではなく、どんな嵐の中でも揺るがない心の安定を指しています。

それは、恐れのない世界ではなく、「神が共におられる世界」です。

ゼロリスクを追い求めることではなく、神の臨在の中に生きることこそが、真の平安の出発点です。

### 1. 平安は「リスクの排除」ではなく「信頼の充満」

イエスは弟子たちにこう語られました。

わたしは平安をあなたがたに残して行く。わたしの平安をあなたがたに与える。わたしが与えるのは、世が与えるようなものとは異なる。あなたがたは心を騒がせるな、またおじけるな。（ヨハネ福音書 14 章 27 節）

ここでイエスは、「世が与える平安」と「キリストが与える平安」を区別しています。

世の平安とは条件付きの平安です。健康である、収入が安定している、災害が起きない——こうした状態が崩れると、平安も一瞬で失われてしまいます。

一方、キリストが与える平安は、条件に依らない平安です。外的な環境がどうであれ、「神が共におられる」という確信が心を支える。これが信仰による平安であり、恐れを超えた静けさです。

### 2. 「あすのことを思い煩うな」—未来の支配を手放す

イエスは山上の説教でこう言われました。

「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう。だから、あすのことを思いわずらうな。あすのことは、あす自身が思いわずらうであろう。」（マタイ福音書 6 章 33~34 節）

この言葉の核心は 34 節ではなく 33 節にあります。優先順位を「神の国」に置くと、未来の不確実さに対する過剰な支配欲は自然に手放されていく——これがイエスの示した道です。

人は未来の不確実性に不安を感じ、それをコントロールしようとします。そして、恐れを打ち消すために「完全な安全＝ゼロリスク」を追い始めるのです。

しかし、それは永遠に届かない目標であり、心を疲弊させるだけです。

イエスが示された道は、未来を支配するのではなく、未来を神にゆだねる生き方です。その信頼の中にこそ、平安があります。

思いわずらいを手放すとは、無関心になることではなく、神の支配にゆだねることです。

### 3. 詩篇に見る「嵐の中の平安」

詩篇には、このような言葉があります。

神はわれらの避け所また力である。悩める時のいと近き助けである。このゆえに、たとえ地は変わり、山は海の真中に移るとも、われらは恐れない。(詩篇 46 篇 1～2 節)

ここで語られているのは、「嵐がない平安」ではなく、「嵐の中でも恐れない平安」です。

自然が揺らぎ、社会が混乱し、人生が思いどおりに進まなくても、神が避け所である限り、心は沈まない。平安とは、危険の欠如ではなく、神の臨在の確信なのです。

ゼロリスク社会が目指す「恐れのない世界」は、外側を整えることに終始します。

しかし、聖書が語る「平安の世界」は、心の中心に神を迎えることで生まれます。

### 4. 恐れから平安への支配へ

恐れは、人の思考を狭くし、他者を疑い、社会を硬直させます。ゼロリスク信仰が広がると、人々は互いを監視し、責任を恐れ、自由を失っていきます。

しかし、神への信頼が広がるとき、人はおおらかになり、寛容になり、行動に勇気が生まれます。

ピリピ人への手紙には、こう書かれています。

何事も思い煩ってはならない。ただ、事ごとに、感謝をもって祈と願いとをささげ、あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい。そうすれば、人知ではとうてい測り知ることのできない神の平安が、あなたがたの心と思いを、キリスト・イエスにあって守るであろう。(ピリピ人への手紙 4 章 6～7 節)

神の平安は、理屈を超えています。恐れや不安が消えるから平安なのではなく、恐れの中でも信頼を保てるから平安なのです。

それは、「何が起こっても大丈夫」という自分への自信ではなく、「何が起こっても神が共におられる」という確信です。

## 5. 「平安」は行動する人の中に宿る

平安は、静かに座して待つ人にだけ与えられるものではありません。信仰をもって歩み出す人にこそ、平安は宿ります。

リスクを恐れて止まるのではなく、神を信じて進むとき、心に穏やかな力が湧いてくる。それが、ゼロリスク信仰には決して得られない「平安の体験」です。

アブラハムが旅立ったときも、ペテロが水の上を歩いたときも、彼らの周囲は決して安全ではありませんでした。

それでも歩み出したのは、「神が共におられる」という確信が心を支えていたからです。

平安とは、安全の中で守られるものではなく、信頼の中で与えられるものです。

## 6. 結びに一平安は「神と共にある」ことそのもの

ゼロリスク信仰は「恐れのない世界」を夢見ますが、聖書は、「恐れの中でも神と共にある世界」を示します。

両者の違いは、外側の環境に平安を求めるか、内なる信頼に平安を見いだすかです。

人事を尽くし、最善を尽くすことは必要です。しかし、最後の一線——未来・結果・命——を神にゆだねることができる人こそ、真の平安を生きる人です。

**あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。（詩篇 37 篇 5 節）**

この一節にこそ、ゼロリスク信仰から解放された人生の答えがあります。

私たちは、恐れのない人生を生きることはできませんが、恐れの中で神を信じて歩むことはできます。

そこにこそ、「神と共にある世界」——真の平安の実現があるのです。

あなたの生活の中に、「恐れのためにできないでいること」はありますか。

その恐れの本体を見つめてみてください。それは本当に危険への配慮でしょうか。それとも、神への不信頼が形を変えたものでしょうか。

聖書の信仰者たちは、安全を確認してから歩き出したわけではありません。神の言葉を信じて、一步を踏み出しました。そのとき初めて、道は開かれたのです。

**「あなたの道を主にゆだねよ」（詩篇 37 篇 5 節）——この言葉を、今日の一歩の出発点としてください。**